

## 5. 複数の言語を話せる人が多い。

ヨーロッパでは3ヶ国語(3言語)<sup>544</sup>以上、話せる人が多い。特に、小国(ベルギー、ルクセンブルク、スイス等)でマルチリンガルの割合が高くなっており<sup>545</sup>、複数の欧州の言語を自由自在に操れる人をヨーロッパ人として捉えることができる。なお、後述するように、複数の言語が使用されている国もあるため、マルチリンガルが国際的とは限らない。

言語は民族ないし住民のアイデンティティを形成する要素である(言語ナショナリズム)<sup>546</sup>。ヨーロッパでは言語の重要性が強く認識されており、複数の言語を公用語に指定する国も珍しくない<sup>547</sup>。同様に、多言語化を推進する地方自治体がある(557頁参照)。以下では公用語を複数、持つ国として、ベルギー、ルクセンブルクを取り上げ説明する。

### 5.1. ベルギー

ベルギーは隣接する以下の三つの国の言語を公用語に指定する。なお、ベルギー語と呼ばれる言語はない。

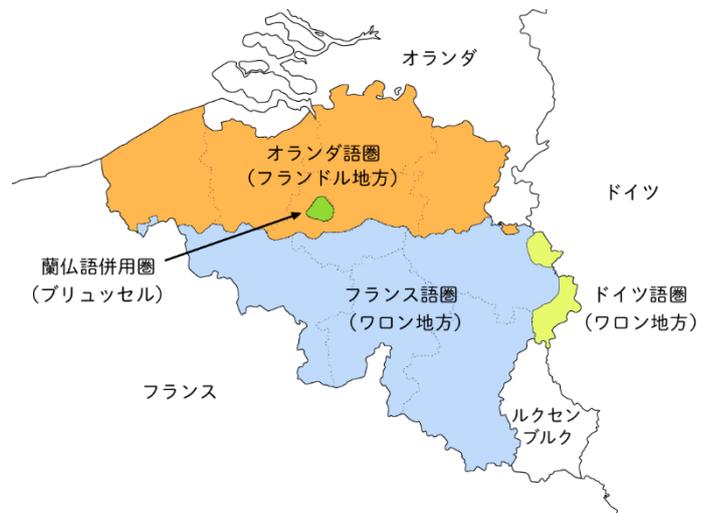
- ① オランダ語(オランダ語の方言の一つで「フラマン語」とも呼ばれ、フランス語の影響を受けている)
- ② フランス語
- ③ ドイツ語

#### 1) 四つの言語圏

ただし、ベルギー全土でこれらの言語が公用語に指定されているわけではなく、国内は以下の四つの言語圏に分かれる(ベルギー憲法第4条参照)。

- ① オランダ語圏(フラマン語圏 人口約680万)
- ② フランス語圏(約360万)
- ③ ドイツ語圏(約8万)
- ④ 蘭仏語併用圏(ブリュッセル首都圏 約120万)

オランダ語とフランス語が併用されるブリュッセルを除き、各言語圏の公用語は一つである。例えば、オ



<sup>544</sup> 言語は国単位で存在するわけではない。例えば、オーストリアはドイツ語を公用語としており、オーストリア語と呼ばれる言語はない。また、独語、仏語、伊語は何れもスイスの言語であるため、「ヶ国語」という表現は正しくない。

<sup>545</sup> 3言語以上、話せる人の割合は、ルクセンブルクで92%、オランダで75%、スロベニアで71%、ベルギーで67%である。これに対し、人口の多いドイツでは27%、フランスでは21%、イギリスでは18%、スペインでは17%と低い。See European Commission, Europeans and their Languages, Special Eurobarometer 386, 2012。中小国でマルチリンガルの割合が高い主な理由として、隣国の言語を習得しないと、就職・就学に不利になることが挙げられる。

<sup>546</sup> 地方の言語や少数派の言語を保護・奨励するため、1992年7月、欧州評議会は「地方または少数言語のためのヨーロッパ憲章」を採択した。なお、この憲章によって保護されるのは締結国内で伝統的に使用されている言語であり(例えば、スペインにおけるカタルーニャ語、イギリスにおけるアイルランド語)、近年、締約国に移住した者の言語や方言は含まれない。2023年10月1日現在、同評議会に加盟する25のヨーロッパ諸国が憲章を批准している。

また、言語学習の重要性を広め、文化の多様性を促進するため、2001年12月、同評議会は9月26日を「ヨーロッパ言語の日」に指定した。また、オーストリア・グラーツに「ヨーロッパ現代言語センター」(European Centre for Modern Languages, ECML)を設置し、語学教育・学習を支援している。

<sup>547</sup> 例えば、以下のヨーロッパ諸国は複数の言語を公用語に指定している。

- ・ベルギー(オランダ語、フランス語、ドイツ語)
- ・ルクセンブルク(ルクセンブルク語、ドイツ語、フランス語、186頁参照)
- ・スイス(ドイツ語、フランス語、イタリア語、ロマンシュ語、187頁参照)
- ・フィンランド(フィンランド語、スウェーデン語)
- ・アイルランド(アイルランド語、英語)
- ・キプロス(ギリシア語、トルコ語)

なお、第1次世界大戦後、ヨーロッパでは民族自決の原則に基づき、民族単位で多数の国家が建設されたが(383頁参照)、これは言語単位で国家が建設されることを意味しており、一般的には「一国家一言語」である。

ランダ語圏の公用語はオランダ語のみで、フランス語は公用語に指定されていない。つまり、国の公用語は三つあるが、地域の公用語は一つである（ブリュッセルのみ二つ）。そのため、多言語社会とは言えない。この「1 地域 1 言語制度」は多様性の尊重には反するが、オランダ語がオランダ語圏でも使用されていなかった状況を改善するために導入された（184 頁参照）。

首都ブリュッセルは地理的にはオランダ語圏の中にあるが、蘭仏が併用される第 4 の言語圏である。ただし、フランス系の住民や旧植民地からの移民（仏語を母語とする者）の割合が圧倒的に高く、フランス語が広く使用されている。つまり、ブリュッセルは実質的にフランス語圏である。しかし、現在でもオランダ語圏の中心地になっているため（次頁参照）、オランダ語も公用語に指定されている。歴史的に、この都市はオランダ系住民の要所として発展し、仏語が主流になったのは 18 世紀以降（特に、フランスに併合された 1794 年以降）である。なお、蘭語を保護・推奨するため、ブリュッセル首都圏に属する地方自治体政府のメンバーがオランダ系住民の中から法定の人数より多く任命されると地方助成金が増額される。

## 2) 三つの共同体と三つの地方

上述したように言語圏は四つあるが、国の公用語は三つである。ベルギー憲法第 2 条はそれに即し、国内を三つの「**共同体**」に分け、各共同体に教育、文化、健康等に関する立法・行政権を与えている。そのため、授業で使用される言語や外国語教育の内容・開始時期等は国ではなく、各共同体によって決定される。なお、オランダ語圏の共同体の名称は「オランダ共同体」ではなく、「フランドル共同体」になっており、オランダとの距離感が見て取れる。

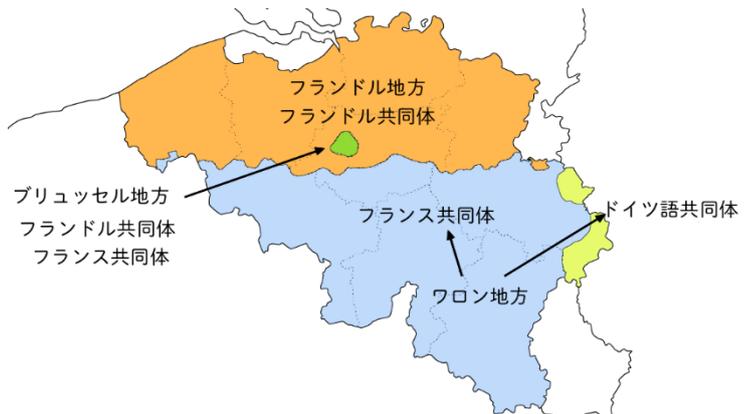
その他に、ベルギー憲法は国内を下記の三つの「**地方**」に分け（第 3 条）、各地方に経済、貿易、運輸、環境等に関する権限を与えている<sup>548</sup>。これに対し、司法・内政、外交、安全保障は「連邦」、つまり、国の管轄事項とする。

- ① フランドル地方（フランデレン地方、英語音訳ではフランダース地方）
- ② ワロン地方
- ③ ブリュッセル地方

**フランドル地方**は全域がオランダ語圏であり、フランドル共同体と実質的に同じである（次頁参照）。

**ワロン地方**<sup>549</sup>はフランス語圏のフランス共同体とドイツ語圏のドイツ語共同体<sup>550</sup>で構成される。

他方、**ブリュッセル地方**はフランドル共同体とフランス共同体からなる。これらが示すように、「地方」は言語を基準にして設けられているのではない。



フランドル地方	ワロン地方		ブリュッセル地方	
フランドル共同体	フランス共同体	ドイツ語共同体	フランドル共同体	フランス共同体

このように、ベルギーは「地方」と「共同体」という「二重の連邦制」を採用し、それぞれに立法・行政権を与えている。前者は地域再生に取り組むベルギー南部のワロン地方によって、後者はオランダ語の復権を目指す北部のフランドル地方によって提唱された。

<sup>548</sup> 地方議会は自らの管轄権の範囲で条約を締結することができる。例えば、第 3 国との経済協力や貿易に関する協定の締結が可能であるが、そのために EU・カナダ間の条約締結が遅れた。EU はカナダと 6 年に亘る交渉の末、経済協力・貿易について合意し、2016 年 10 月下旬、包括的経済・貿易協定 (CETA) を締結する計画を立てた。その実現には全ての EU 加盟国の承認が必要であったが、ベルギーは地方議会が承認を拒んだため、承認できず、EU の行動に足かせをはめることになった。

<sup>549</sup> ワロン地方ではフランス語の方言である「ワロン語」が話されているが、ワロン語はベルギーの公用語ではない。

<sup>550</sup> 「ドイツ共同体」ではなく、「ドイツ語共同体」という名称になっているのは、ドイツ語はドイツだけではなく、オーストリア、スイス、ルクセンブルク、リヒテンシュタインでも（公用語として）使用されていることによる。

## 【参考】

## ① ワロン地方

「地方」と「共同体」はそれぞれ独自の政府と議会を持つ。そのため、フランス系住民の機関として、ワロン地方の政府と議会がナミュールに、また、フランス共同体の政府と議会がブリュッセルに設置されている。なお、ワロン地方議会選挙で選ばれた議員（定数 75）はフランス共同体の議員を兼ねる（共同体の議会選挙は行われない）<sup>551</sup>。首相は議会によって選出される。地方政府首相と共同体政府首相は同一人物であってもよいが、2024 年 4 月現在、下記のように異なっている。

ワロン地方政府首相：Elio Di Rupo（元ベルギー首相）

フランス共同体政府首相：Pierre-Yves Jeholet

## ② フランドル地方

「共同体」、つまり、言語圏を重視するフランドルは「共同体」が「地方」の権限を代わりに行使している（憲法第 137 条はこれを認める）。その結果、「地方」の政府・議会は設置されておらず、「共同体」の政府・議会しか存在しない。なお、両機関はブリュッセルに置かれている。つまり、ベルギーの首都ブリュッセルは、フランドル共同体（フランドル地方）の首都にもなっている。この都市でオランダ語はほとんど使用されていないが、それも公用語に指定されているのはそのためである（前頁参照）。

なお、かつてベルギー北西部には**フランドル伯**（864～1795 年、473 頁参照）の領土、つまり、**フランドル伯領**が置かれていたが<sup>552</sup>、それとフランドル地方の範囲は一致していない。端的には、フランドル地方の方が大きい。フランドル伯領はスヘルデ川（フランス語ではエスコー川）の西側にあたる地域であったのに対し（現在、この地域には「東フランドル州」と「西フランドル州」が置かれている）、フランドル地方にはその東側も含まれる。また、この伯領はオランダ南部にもまたがっていたが<sup>553</sup>、オランダ南部はフランドル地方に含まれない。



## ③ ブリュッセル首都圏

ブリュッセルの地方自治では「地方」が重要になるが<sup>554</sup>、蘭仏語併用圏であることも考慮されている。つまり、議会はワロン地方に基盤を置く政党に所属する 72 名<sup>555</sup>とフランドル地方に基盤を置く政党に所属する 17 名からなり、首相はフランス系の住民でなければならない。首相と閣僚（両地方の政党から 2 人ずつ）は議会によって選出される。なお、選挙は比例代表制により、被選挙権者は自らの意志でどの言語圏の政党に属すか決めなければならない。

<sup>551</sup> ワロン地方議会にはドイツ語圏の者も属すが、同人はフランス共同体の議会には属さない。これに対し、フランス共同体の議会にはブリュッセルのフランス語系政党の議員 19 人が属す。

<sup>552</sup> フランス革命期の 1795 年、フランドル伯の爵位は廃止され、現在、フランドル伯領は存在しないが、中世、この伯領は対岸にあるイングランドから羊毛を輸入し、毛織物業で栄えた。この伯領を代表する都市として、ヘント、ブルージュ、フランスのリールが挙げられる。

<sup>553</sup> スペインから独立したネーデルラントの北部 7 州にフランドル伯爵領の大部分は含まれないが、その北部にあった一部の都市は含まれ、スペインから独立した。

<sup>554</sup> ブリュッセルは独自の「共同体」ではなく、フランドル共同体とフランス共同体の両方に属す。そのため、両方の共同体が権限を行使する。

<sup>555</sup> その内の 19 名はフランス共同体の議員を兼ねる。

### 3) オランダ語圏（フランドル共同体）とフランス語圏（フランス共同体）の対立

オランダ語圏（フランドル共同体）とフランス語圏（フランス共同体）の間には超えられない「言語の壁」があり、18世紀より対立しているが、近年は経済的に発展したオランダ語圏で分離・独立運動が強まっている<sup>556</sup>。なお、ともにカトリック教徒が多く、宗教的な対立はない。また、オランダ語圏にはゲルマン系、フランス語圏にはラテン系の住民が多いとはいえ、民族的な対立はない。

#### ◎ 対立の背景 ～ オランダ語やオランダ語圏の特殊性 ～

ベルギーという国が成立したのは1831年であり、それまではオランダ国内の地域であった（476頁参照）。その約40年前、ベルギーはフランスに占領され、国の南部（ワロン地方）はフランス語圏としての性質を強める。これに対し、オランダに接する北部（フランドル地方）はオランダ語圏であるが、公的機関、教会、学校等ではフランス語が使用され、公文書はこの言語でのみ作成されたため、オランダ系住民の反発を生んだ。

1814年、ナポレオンが失脚し、フランスから解放されると、ウィーン会議の決議に従い、ベルギー地方はオランダに併合されることになった。それを快く思わなかったブルジョワジーは、オランダ系であれ、仏語を好んで用いた。こうして言語問題は社会階級間の対立という側面を持つようになる。なお、オランダに併合されていた期間は15年ほどであり、1830年、ベルギーはオランダからの独立を宣言した。

第1次世界大戦中、ベルギーはドイツに攻め込まれるが、軍隊の上層部はフランス語を話したのに対し、兵士の中にはオランダ語しか分らない者がおり、言語問題が浮き彫りになる。なお、ベルギーを占領したドイツはオランダ語圏の住民の側につき、フランス語圏との対立を煽った<sup>557</sup>。

大戦後の1919年、オランダ語の復権を目指した取り組みが本格化する。また、1932年、オランダ語圏でもオランダ語が使用されない状況を改善するため、「1地域1言語制度」が導入された。しかし、社会の上層部や高度な技能を持った者にオランダ語の話者は少なく、言語問題は容易に解消しなかった。

第2次世界大戦期にもベルギーはドイツに占領されたが、オランダ語圏がナチス・ドイツに加担したことは対立の新しい要因になる。

1963年、国内の言語圏（言語共同体）を確定する法律が施行され、オランダ語圏ではオランダ語の使用が徹底されるようになった。しかし、フランス系住民に対する敵対心は現在でも残っており、フランス系住民は差別や不利な扱いを受けることがある。なお、これはフランス系の国民がオランダ語圏でもオランダ語を話さない、もしくは、オランダ語を習得しようとしないうちに起因しており、フランス語圏で、そのような問題は生じていない。

このように、オランダ系の住民が国民の圧倒的多数を占めるにも拘わらず、オランダ語の使用が廃止・抑制されたことが対立を生んだが、オランダ系の住民にとってオランダ人は「傲慢な兄弟」という特殊な存在や階級間の対立も影響した。

両者の対立はスポーツにも影響を及ぼしており、サッカーの代表選手が「言語の壁」を乗り越え、行動をともにするようになったのは21世紀に入ってからである<sup>558</sup>。3位という好成績を収めた2018年のW杯では両地方の住民が一体となって応援したことが注目された<sup>559</sup>。

<sup>556</sup> NZZ v. 15. September 2019 „Sprachenstreit im Land des Surrealismus“. 第2次世界大戦後、フランス語圏は石炭・鉄鋼業で栄えたが、構造改革に失敗し、経済が停滞する。これに対し、オランダ語圏の経済は発展し、中世、貿易地として栄えたアントワープは往年の輝きを取り戻している。このような状況下、蘭語圏では右派政党が躍進し、EUに加盟した状態のままの両地方の分離を訴えている（自らの税金で仏語圏を支援すべきではないと主張する）。他方、フランス語圏では左派政党が有力である。

<sup>557</sup> See interreg, Flandern & Wallonie: Friedliche Lösungen.

<sup>558</sup> 読売新聞「ベルギーが抱える『南北問題』…希薄な国民意識」（2018年7月2日）、<https://www.yomiuri.co.jp/special/worldcup2018/news/3472/>

<sup>559</sup> Claus Heckining, Multikulti mit System, Der Spiegel v. 10. Juli 2018.

このような対立があるものの、両地域で一つの国が建設されているのは、「ネーデルラント」と呼ばれる地理的一体性による。ネーデルラントは現在のオランダ、ベルギー、ルクセンブルク、ドイツ西部にまたがる地域である。その大部分を占めるオランダとベルギーは一つの国であり、スペインに属していた時代もあるが、17世紀半ば、プロテスタントが多いオランダ地方はカトリック教国のスペインから独立した。他方、カトリック教徒が多いベルギー地方はスペインに留まる。なお、当時、ベルギーと呼ばれる国はまだ存在しなかった（474頁参照）。現在でも残る言語的な対立は、前述したように、フランスに併合された18世紀以降に生じている。

オランダ語圏（フランドル地方）の慣習はオランダの慣習に似ているが、宗教的には大きく異なる。つまり、この地域ではカトリックが多いのに対し、オランダではプロテスタントが多い。

#### 4) ドイツ語圏（ドイツ語共同体）

ドイツ西部（アーヘン）やルクセンブルクに隣接するドイツ語圏の人口は約8万で、ベルギーの人口の1%にも満たない。なお、他の言語圏との対立はない。

第1次世界大戦中、この地域はドイツ陣営に与し、ベルギーに侵攻したが、戦後は講和条約（ベルサイユ条約）に基づき、ベルギー領になる。「東ベルギー」(Ostbelgien) と呼ばれることもあるが、正式名称でなく、同国のフランス語圏と共にワロン地方を形成する。なお、ベルギー憲法は四つの言語圏（言語共同体）を認める一方、地域はフランドル、ワロン、ブリュッセルの三つしか認めていない。

問題：サッカーの国際試合において、ベルギーの選手の中には国歌を歌わない者がいる。その理由を考えなさい。

解答例：国歌「**ブラバントの歌**」にはベルギーの三つの公用語、つまり、オランダ語（フラマン語）、フランス語、ドイツ語で歌詞が付けられている。フランス語で斉唱するとされる場合、オランダ語圏出身の選手は反発し、歌うのを拒むことがある。他方、オランダ語が指定されるとき、その言語に不慣れで、歌えない選手もいる。従来、言語は指定されなかったため、どの言語で斉唱すればよいか分からないこともあったが、2023年9月の試合より、3言語で同時に歌うこと、つまり、選手が自分で言語を選んで斉唱することになった<sup>560</sup>。

なお、三つの公用語ではコミュニケーションがとれないため、英語が使用されることもある。

参考：ベルギーは「ブラバントの歌」を国歌とする。ブラバントとはベルギー中央部にある地域の名称で、首都ブリュッセルもこの地域にある。この歌は1830年、オランダからの独立を目指す過程で誕生し、歌詞はフランス語で書かれた。4番まである歌詞はオランダを敵視する内容になっていたため、独立達成後、修正されることになり、1860年、新しい歌詞が完成した。しかし、それは「何世紀にも亘る奴隷制を経て、墓から出てきたベルギー人」(Après des siècles d’esclavage, Le Belge sortant du tombeau) という一節で始まるため、新たに批判されることになる。歌詞を再変更する試みもあったが、1921年、4番のみを斉唱する案が出されると、支持されるようになった。現在でも4番のみ歌われているが、国民が母国ベルギーのために心、腕、血を捧げ、国王、法、自由を称える内容になっており、必ずしも現代的ではない。

フランス語で作成された歌詞はオランダ語とドイツ語に翻訳されている<sup>561</sup>。また、3言語を織り交ぜたヴァージョンもある。どの歌詞で歌うか、特に定められていないが（式典で国家が常に斉唱されるわけでもない）、7月21日（1831年、初代国王の即位を記念した日）には、国王は言語に中立でなければならないため、三つの言語でそれぞれ斉唱されることになっている。

<sup>560</sup> See taz v. 12. September 2023, “Gemischte Hymne”.

<sup>561</sup> 3言語での歌詞は必ずしも一致しているわけではない。例えば、オランダ語版の「神聖なる国」(heilig land) という表現は他の言語版では使用されていない。

## 5.2. ルクセンブルク

ルクセンブルクは、ルクセンブルク語の他に、フランス語とドイツ語を公用語に指定する。なお、ルクセンブルク語はドイツ語の方言であり、独自の言語としては認められていない<sup>562</sup>。そのため、ルクセンブルク語が公用語に指定されたのは1984年と遅く、それまではドイツ語とフランス語が公用語であった。

歴史的に、ルクセンブルクはドイツ語圏に属すが、18世紀末から19世紀初旬にかけて、つまり、フランス革命期からナポレオンの帝政期、フランスに占領され、その影響を強く受けるようになった(478頁以下参照)。

ルクセンブルクには前述したベルギーのように言語圏があるわけではなく、三つの言語が共存している。公的機関でも3言語が使用されており、市民は何れかの言語で問い合わせることができる。もっとも、公文書は仏語でのみ作成されることが一般的である。地域(州)のWebサイトも、ドイツに近い一帯を除けば、フランス語でしか作成されていない。法律も、議員はルクセンブルク語で討論するが、フランス語で制定される。

活字媒体の主流はドイツ語であり(独語の新聞・雑誌に仏語の記事が掲載されることもあるが、翻訳は付かない)、職場や商業施設ではフランス語が使用されることが多い。つまり、ルクセンブルク語の使用は限定されている<sup>563</sup>。なお、EUは全ての加盟国の公用語、つまり、24の言語を公用語に指定しているが(192頁参照)、上述した特殊性に基づき、ルクセンブルク語はその中に含まれていない。

ルクセンブルクの義務教育は4歳より行われる。4~5歳児を対象にした幼稚園ではルクセンブルク語が使用されるが、6歳以上の児童が通う小学校ではドイツ語で授業が行われる。つまり、小学生は独語を先に習う。なお、ルクセンブルクでは外国人ないし移民の割合が高く、小学生の半数はルクセンブルク語を母語としていない。そのため、早い段階から、フランス語や英語の教育も行われているが、幼い児童の負担や学習効果・効率正が問題になることもある(スイスの状況について、187頁参照)。成人の大半は4言語(例えば、ルクセンブルク語、ドイツ語、フランス語、英語)を理解することができる。

人口が僅か66万のルクセンブルクには2003年まで2年制の大学しかなかった。3年次からはドイツ、フランス、ベルギーといった隣接国で学ぶ必要があり、これも外国語の修得を促した。なお、ドイツの大学のほとんどは公立で、授業料を徴収せず、公費で運営されている。ルクセンブルクに隣接し、同国からの留学生が多いドイツ・ザールラント州(591頁参照)は州内の大学の維持・運営費の分担をルクセンブルクに求めている。

かつては東部のドイツ語・ルクセンブルク語圏と西部のフランス語圏に分かれていたが、1839年、前者の一部(ルクセンブルク語圏)と西部はベルギーに併合された(480頁参照)。ベルギー領になった地域は「リュクサンブール州」と呼ばれ、ルクセンブルクと同じ名称が付けられているため、混乱しかねない。なお、「リュクサンブール」は国号のフランス語音訳であり、「ルクセンブルク」はドイツ語音訳である。

仏語：Luxembourg (リュクサンブール)

独語：Luxemburg (ルクセンブルク)

ベルギー領になったリュクサンブールの面積は現在のルクセンブルクよりも大きく、それをベルギーに割譲することで、ルクセンブルクの国土はますます小さくなった。現在の面積(2,586km<sup>2</sup>)は神奈川県とほぼ同じである。なお、面積、人口、経済の面で規模が小さな国を「ミニ国家」と呼ぶが、ルクセンブルクはそれに含まれない。つまり、ルクセンブルクより小さな国がある(213頁参照)。

※ ルクセンブルクの歴史について、478頁以下を参照されたい。



<sup>562</sup> Peter Gilles, Die Emanzipation des Lëtzebuergeschen aus dem Gefüge der deutschen Mundarten, Zeitschrift für deutsche Philologie, 117, 1998, pp. 20–35.

<sup>563</sup> See Luxembourg.lu, Quelles Langues Parle-T-On Au Luxembourg?, in <https://luxembourg.public.lu/fr/societe-et-culture/langues/langues-au-luxembourg.html>

【参考】スイス

スイスは、ドイツ語、フランス語、イタリア語、ロマンシュ語を公用語とする。ただし、ベルギーのように「1 地域 1 言語」が主であり、これらの 4 言語を公用語に指定している地域 (州 Kanton) は一つもない。複数の言語を公用語にしている地域も全 26 地域中、四つに留まる。

ほとんどの地域 (州) はドイツ語を公用語としており、17 の地域ではそれが唯一の公用語である。フランス語のみを公用語とする地域は四つあり、独仏両言語を公用語とする地域は三つに留まる。最も多い 3 言語 (ドイツ語、イタリア語、ロマンシュ語) が公用語になっているのはグラウビュンデン州のみで、イタリア語はこの州とティチーノ州でのみ公用語に指定されている<sup>564</sup>。

ドイツ語圏の州	フランス語圏の州	独語・仏語併用州	イタリア語圏の州	ドイツ語 イタリア語 ロマンシュ語
Aargau Appenzell Innerrhoden Appenzell Ausserrhoden Basel-Landschaft Basel-Stadt Glarus Luzern Nidwalden Obwalden St. Gallen Schaffhausen Solothurn Schwyz Thurgau Uri Zug Zürich	Genf Waadt Neuenburg Jura	Bern Freiburg Wallis	Tessin	Graubünden

※ 州名の表記はドイツ語による。

一つの言語のみを公用語にする国からすると、非常に特殊であるが、スイスはこの多言語性を国のアイデンティティとしており (49 頁参照)、ベルギーで発生しているような言語対立はない。ただし、他の公用語<sup>565</sup>を教える学年に関しては争いがある。一部のドイツ語圏の州では「小学校でのフランス語の授業」(Frühfranzösisch) は児童の負担が大きいと、廃止されたが、スイスらしくないという意見もあり、両者の対立は「言語戦争」(guerre des langues) に発展している<sup>566</sup>。

なお、公用語は四つもあるが、スイスにはそのどれも理解できない外国人がいるため、英語の使用率も高い<sup>567</sup>。また、15 歳以上の住民の約 4 割は外国人であり、英語が第 2 の公用語になりつつある<sup>568</sup>。前述したように、小学校におけるフランス語の授業を廃止する一方、英語を教えるドイツ語圏の地域もあり、議論を呼んでいる<sup>569</sup>。

<sup>564</sup> Pons, Sprache in der Schweiz, in <https://de.pons.com/p/wissensecke/sprache-und-kultur/sprachen-in-der-schweiz>

<sup>565</sup> なお、スイス人にとって、ドイツ語、フランス語、イタリア語、ロマンシュ語は外国語ではない。

<sup>566</sup> Peter Blunsi, Eine Fremdsprache in der Primarschule? Jawohl – mais français, s'il vous plaît!, in <https://www.watson.ch/schweiz/kommentar/812514247-eine-fremdsprache-in-der-primarschule-jawohl-mais-francais-s-il-vous-plait>. See also François Grin, Die Sprachdebatte in 15 Fragen: Zahlen, Fakten und Argumente.

なお、学校教育に関する権限は地域 (州) が保有しているが、教育政策の調整が義務づけられている (スイス連邦憲法第 62 条第 4 項)。

<sup>567</sup> Schweizerische Eidgenossenschaft, Die Sprachen – Fakten und Zahlen, in <https://www.eda.admin.ch/aboutswitzerland/de/home/gesellschaft/sprachen/die-sprachen---fakten-und-zahlen.html>

<sup>568</sup> Christophe Büchi, Zerfällt die mehrsprachige Schweiz?, in <https://www.nzz.ch/schweiz/ld.1807366>

<sup>569</sup> Blunsi, ibidem.

## 【参考】旧ユーゴスラビア

バルカン半島南西部に建てられていたユーゴスラビアは六つの共和国で構成されていた。それらは何れも南スラブ人（226 頁参照）の国であったが、連邦国家の運営や社会主義のあり方をめぐり様々な対立を生んだ。冷戦終結後、共産党体制が崩壊し、社会主義の理念が失われると、民族対立が激化し、ユーゴスラビアは分裂したが（544 頁参照）、それまで下記の言語を公用語に指定していたと言われている<sup>570</sup>。

- ・セルビア語
- ・クロアチア語
- ・スロベニア語
- ・マケドニア語（ブルガリア語） ※ マケドニア語はブルガリア語の方言とする見解について、94 頁参照

これらの4言語の内、セルビア語とクロアチア語は非常によく似ており、文法もほとんど異ならない。そのため、通訳なしで意思の疎通が可能である。ただし、文字は大きく異なっており、クロアチア語はラテン文字（ローマ字）で、他方、セルビア語はキリル文字（191 頁参照）で記される。この点を除くと、ほとんど異ならないため、ユーゴスラビア解体前、両言語は一括して「セルビア・クロアチア語」と呼ばれていた。しかし、民族対立を理由に解体されると、二つの異なる言語として意図的に区別されるようになった。また、セルビア語やクロアチア語とはほとんど異ならないが、ボスニア語という概念も生まれた（後述参照）。

## 1) セルビア・クロアチア語

かつて、ユーゴスラビア構成国はオスマン帝国やオーストリアに支配されていたが、19 世紀中頃、南スラブ人の独立と国家建設を目指す過程で、言語を共通化する活動も行われた。これは諸地域で使用されていた方言の標準化（標準語の導入）や「書き言葉」の統一を目指す試みで、オーストリアの首都ウィーンに滞在していたセルビア、クロアチア、スロベニアの言語学者や作家達が運動の発起人になる<sup>571</sup>。彼らによって提唱されたのが「セルビア・クロアチア語」（srpskohrvatski/српскохрватски）<sup>572</sup>であるが、それは新しい言語か、それとも、セルビアやクロアチアで話されていた言語を統括する新しい言語名に過ぎないか現在でも争われている。一般的な見方は後者であり<sup>573</sup>、セルビア・クロアチア語は**複数中心地的な言語（多極的言語）**<sup>574</sup>にあたる。

なお、複数中心地的言語の代表格である英語は、イギリス、アメリカ、オーストラリア、インド等で公用語に指定されており、それぞれの国で違いはあるものの、この言語は英語と呼ばれている。これに対し、旧ユーゴスラビアでは、セルビア、クロアチア、ボスニア・ヘルツェゴビナといった地域（厳密には、ユーゴを構成する共和国）で話されていた言語が19 世紀後半以降、「セルビア・クロアチア語」と呼ばれるようになった。これが可能であったのは各地域で話されていた言語は同一ないしほとんど異ならなかったためである。

<sup>570</sup> 例えば、三谷恵子「言語の自立と社会—ユーゴスラヴィア（SFRJ）崩壊から10年を経て—」『Dynamiz』Vol. 6（2002年）28～48頁（31頁）を参照されたい。

<sup>571</sup> Dirk Auer, Ex-Jugoslawien, Wenn Sprachen zum Politikum werden, in <https://www.deutschlandfunk.de/ex-jugoslawien-serbien-kroatien-bosnien-montenegro-sprachen-100.html>

<sup>572</sup> 「ボスニア語・クロアチア語・セルビア語」（それぞれの頭文字を組み合わせで“BKS”）とも呼ばれる。

<sup>573</sup> Snježana Kordić, Pro und kontra: ‚Serbokroatisch‘ heute, Marion Krause and Christian Sappok eds., Slavistische Linguistik 2002, Referate des XXVIII, Konstanzer Slavistischen Arbeitstreffens, Bochum 10.9.-12.9.2002, Vol. 434, pp. 97-148.

<sup>574</sup> 複数中心地的な(pluricentric)言語とは、例えば、イギリス、米国、オーストラリアで公用語として使用されていて、これらの国で差異はあるものの「英語」として扱われている言語である。See Barbara Schuppler and others, An introduction to pluricentric languages in speech science and technology, Speech Communication, Vol. 156, 2024.

1954年、ユーゴスラビア政府が立ち上げた専門家委員会はセルビア（モンテネグロを含む）、クロアチア、ボスニア・ヘルツェゴビナで話されていた言語を「セルビア・クロアチア語」とする決定を下した。以後、それは公用語の一つになったため、ユーゴスラビアの公用語は四つではなく、三つと捉えることもできる。

## 2) ユーゴスラビア解体後の諸国の言語

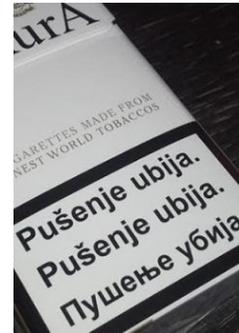
前述したように、六つの共和国で構成されていたユーゴスラビアは、諸国間の対立を理由に、冷戦終結後の1991年、解体された。セルビア・クロアチア間の確執を背景とし、「セルビア・クロアチア語」という概念はほとんど使用されなくなり、現在、セルビア語とクロアチア語は、ほとんど異ならないにも拘わらず、「1国家1言語」ないし民族ナショナリズムの観点から区別されている。両者の違いは、ユーゴスラビア解体後、意図的に生み出されたものである<sup>575</sup>。ユーゴスラビアでは四つの言語が使用されていたという見方も、これに沿っており、ユーゴ解体後に浸透した。

なお、前述したように、セルビア語とクロアチア語に大きな違いはないが、例えば、1996年冬、クリントン米大統領がクロアチアを訪問した際、クロアチアのトウジマン大統領は、セルビア語で「嬉しい」（“srecan”）と語ったことが話題になった<sup>576</sup>。クロアチアのジャーナリストはそれを自国の言語に置き換えようとしたが、この言語では“sretan”と記される。

## 3) ボスニア・ヘルツェゴビナの状況

このように、旧ユーゴスラビアにおいて、言語は南スラブ人の一体性を高めるための、また、その違いを強調するための道具にされてきた。ユーゴスラビアからボスニア・ヘルツェゴビナが独立すると（546頁参照）、ボスニア語の存在も意識されるようになる<sup>577</sup>。現在、同国はボスニア語の他に、クロアチア語とセルビア語を公用語としている。もっとも、三つの言語は、例えば、ドイツ、オーストリア、スイス<sup>578</sup>、リヒテンシュタインで話されているドイツ語のように、多少の違いはあっても、基本的に同じである。しかし、公文書、学校の教科書、製品の注意書き（右図参照）等は三つの言語で作成ないし記載されている。教科書も異なる言語で書かれているため、授業は時間をずらして（例えば、午前中はボスニア語で、午後はセルビア語で）行われる<sup>579</sup>。

なお、ボスニア語とクロアチア語は共にローマ字を使用し、つづりもほとんど異ならないため、無用な「言語ナショナリズム」と批判されることがある。同様に、公用語の一本化を目指す試みも、それを行わなくても意思の疎通に困ることはないため、不要とされている<sup>580</sup>。



ボスニア・ヘルツェゴビナで販売されている煙草のパッケージ<sup>581</sup>

上から順にボスニア語、クロアチア語、セルビア語で「喫煙は死をもたらす」(Smoking kills)という意の警告が記載されているが、前2者は同一である。セルビア語はキリル文字を使用しているため、表記は大きく異なるが、発音は（ほとんど）異なるない。

<sup>575</sup> ORF, Wie aus einer Sprache vier wurden, in <https://oe1.orf.at/artikel/280666/Wie-aus-einer-Sprache-vier-wurden>

<sup>576</sup> Auer, op. cit.

<sup>577</sup> 同様に、モンテネグロの独立後、モンテネグロ語の独自性も意識されるようになった。

<sup>578</sup> ただし、スイスで使用されているドイツ語は訛りが強く、「スイス・ドイツ語」と呼ばれており、ドイツ人でも容易に理解できるわけではない（49頁の注157参照）。

<sup>579</sup> Auer, op. cit.

<sup>580</sup> Ibidem.

<sup>581</sup> 画像出典 [https://de.m.wikipedia.org/wiki/Datei:Cigarette\\_packet\\_warning\\_signs\\_from\\_Bosnia\\_and\\_Herzegovina.jpg](https://de.m.wikipedia.org/wiki/Datei:Cigarette_packet_warning_signs_from_Bosnia_and_Herzegovina.jpg)

## 【参考】ヨーロッパの言語と文字

### 1. 言語

現在、ヨーロッパでは約 40 の言語が使用されており、それらは以下のように分類することができる。

ラテン語派	イタリア語、フランス語、スペイン語、ポルトガル語等 (ラテン語について、219 頁参照)
ゲルマン語派	ドイツ語、英語、オランダ語、デンマーク語、ノルウェー語、スウェーデン語等
スラブ語派	チェコ語、スロバキア語、ポーランド語、ルーマニア語、ロシア語、ウクライナ語等 ※ セルビア語やクロアチア語について、188 頁を参照されたい。
フィン・ウゴル語派	フィンランド語、エストニア語、マジャール語 (ハンガリー語)
バルト語派	ラトビア語、リトアニア語

アイルランド語 (ゲール語) やギリシア語のように、上掲の語派の何れにも属さない言語もある。なお、ギリシア語は西洋文明の基盤となった言語であり、それに由来する単語も少なくない (例えば、キリスト、ユダヤ、民主主義、オリンピック)。

#### ◎ ギリシア語論争

紀元前 8～前 4 世紀、古代ギリシアで使用されていた言語は「古代ギリシア語」と呼ばれる。諸地域ではその方言が用いられ、例えば、アテネではアッティカ方言が、小アジアのイオニアではイオニア方言が話されていたが、アレクサンドロス大王の東方遠征によって始まったヘレニズム時代 (316 頁参照)、両者を基盤として「標準語」が生まれた。これは「共通の」を意味する「コイナー」と呼ばれ、小アジアで広く使用されるようになる。なお、ユダヤ教の経典はユダヤ人の母語であるヘブライ語で書かれていたが、中東やエジプト北部に住む人々が読めるようにするため、前 250～前 100 年頃、アレクサンドロス大王の家臣が興したプトレマイオス朝エジプトでギリシア語に翻訳された。これを『七十人訳聖書』(Septuaginta) と呼ぶ。キリスト教の聖典である『新約聖書』(264 頁参照) は、1～2 世紀、コイナーで編纂された。

4 世紀末頃に成立した東ローマ帝国はコイナーを公用語に指定したが、7 世紀頃より、コイナーは「中世ギリシア語」に変わっていく。1453 年、東ローマがオスマン帝国に滅ぼされると、オスマン語 (トルコ語) がギリシア地方の公用語になるが、コイナーは東方正教会の典礼用語として引き続き使用された。他方、一般社会では口語体が普及した。各地で独自の方言 (口語体) が話されるようになり、アテネの「民衆口語」は「デモティキ」(ディモティキ) と呼ばれた。

18 世紀末から 19 世紀初旬、オスマン帝国に支配されていたギリシアでは民族主義が高まり、「コイナー」や他の古語を基盤にした文語体が言語学者によって考案された。この新しくも、古典的なギリシア語は「カサレヴサ」と呼ばれ、1830 年に発足したギリシア王国の公用語になる。こうして、学校では、この「純粋なギリシア語」が教えられる一方、日常生活では「デモティキ」が使用されるという状況が生じた。

口語体の「デモティキ」と文語体の「カサレヴサ」は何れも「現代ギリシア語」にあたり<sup>582</sup>、同じ文字 (アルファベット) を使用するが、文法や発音は大きく異なる。後者は民族主義者や古代ギリシアの文化を重んじる人々に支持される一方、堅苦しく、国民に馴染まなかったため、「デモティキ」を公用語として復活させる運動が起きた。この言語論争は 140 年近く続き、デモティキを公用語とすることで決着したのは 1976 年である。現在、国内法や国内裁判所の判決だけではなく、EU の文書も、ギリシア語による場合は、デモティキで作成されている。

582 「カサレヴサ」は古典的なギリシア語をベースにしているが、「古代ギリシア」とは異なる。

## 2. 文字 (アルファベット)

ヨーロッパ最古の文字は古代ギリシアの時代に考案され、線文字 A、線文字 B と呼ばれている。何れも 20 世紀初旬、遺跡の中から発見された。前者はまだ解読されておらず、どの言語であったかも分っていないが、それを基にして作られた後者は 20 世紀半ばに解読され、ギリシア語を記すためのアルファベットであることが分っている (312 頁参照)。

現在、欧州では、主に、ギリシア文字、ラテン文字 (ローマ字)、キリル文字が使用されている。なお、ラテン文字はギリシア文字を基にして考案された。キリル文字も同様であり、9 世紀、文字を持っていなかったスラブ人のために正教会の宣教師であるキュリロスとメトディオスの兄弟によって原型 (グラゴル文字) が作られ、聖典の翻訳が行われた。

ギリシア文字	Α Β Γ Δ Ε Ζ Η Θ Ι Κ Λ Μ Ν Ξ Ο Π Ρ Σ Τ Υ Φ Χ Ψ Ω (24 文字) α β γ δ ε ζ ρ θ ι κ λ μ ν ξ ο π ρ σ τ υ φ χ ψ ω
ラテン文字 (ローマ字)	A B C D E F G H I J K L M N O P Q R S T U V W X Y Z (26 文字) a b c d e f g h i j k l m n o p q r s t u v w x y z
キリル文字	А Б В Г Д Е Ж З И Й К Л М Н О П Р С Т У Ф Х Ц Ч Ш Щ Ъ Ы Ь Э Ю Я (32 文字) а б в г д е ж з и й к л м н о п р с т у ф х ц ч ш щ ъ ы ь э ю я

### ◎ 特殊文字

ラテン文字 (ローマ字) を使用する言語のほとんどは特殊文字を持ち、発音の違いを示している。例えば、ドイツ語には ä ö ü という特殊なアルファベットがあり、ä は a (ア〜) とは異なり、「エツ」と強く発音することを示す。これに対し、特殊記号を持たない英語では、name の a は「エイ」と、apple の a は「エツ」と強く、air の a は「エ」と弱く発音するように、アルファベットと発音は一致していない。

[英語] 下の単語内の a の発音は全て異なる。

name  
apple  
air

[独語] アルファベット

a は通常「アー」と発音する。  
Name (ナーメ)  
Japan (ヤーパン)  
ä は通常「エツ」と強く発音する。  
Äpfel (エツプフェル)

### ◎ トルコの国号

トルコの正式名称は「トルコ共和国」(Türkiye Cumhuriyeti) であり、英語では “Republic of Türkiye” と記す。つまり、ü という特殊文字が使われている。従来は “Turkey” と書き、特殊文字は使用されていなかったが、2021 年、トルコ政府は、“Türkiye” が国民性、文化、価値観に最も合致するとし、表記を変更した。なお、従前の綴りは「七面鳥」という意の英単語と同じであり、エルドアン大統領は、この鳥と同じ単語よりも “Türkiye” の方がトルコをより良く表すと述べている<sup>583</sup>。

Turkey (ターキー) → Türkiye (トュルキエー)

※ ü は「ウー・ウムラウト」と読み、ue と記すこともできる。



日本・トルコ国交樹立 100 周年 (2024 年)<sup>584</sup>

同様に、キリル文字でも特殊文字が使用されている。また、アルファベットの数は言語によって異なり、例えば、ロシア語は 33 文字、セルビア語は 30 文字である。

<sup>583</sup> Tiffany Wertheimer, Turkey wants to be called Türkiye in rebranding move, in <https://www.bbc.com/news/world-europe-61671913>

<sup>584</sup> 画像出典 [https://www.istanbul.tr.emb-japan.go.jp/itpr\\_ja/JaponyaTurkiye2024\\_jp.html](https://www.istanbul.tr.emb-japan.go.jp/itpr_ja/JaponyaTurkiye2024_jp.html)

## 【参考】EU の公用語

言語は民族のアイデンティティや文化と密接な関係を持っており、言語の使用禁止は民族の弾圧につながる。EU は言語の重要性と加盟国の多様性を尊重し、全ての国の公用語、すなわち、下に挙げる 24 の言語を公用語に指定している（ただし、ルクセンブルク語とトルコ語を除く<sup>585</sup>）。これは EU 市民が自身の母語で EU に問い合わせ、また、母語で返答を受けることを可能にし、EU はこれを EU 市民の権利として保障する<sup>586</sup>。

### ・ EU の公用語（公用語に採用された順）

ドイツ語、フランス語、イタリア語、オランダ語、英語、デンマーク語、ギリシア語、スペイン語、フィンランド語、スウェーデン語、エストニア語、ラトビア語、リトアニア語、マルタ語、ポーランド語、スロバキア語、チェコ語、スロベニア語、ハンガリー語、ブルガリア語、ルーマニア語

なお、言語の共通化は地域の一体性を高めることに貢献する。また、翻訳作業を省くことができるため、公用語の削減が検討されたこともあるが、言語の重要性を考慮し、従来通りとした。

EU の法律は全ての公用語で制定される。公式サイト<sup>587</sup>の主要部分も全ての公用語で作成されているため、24 の言語バージョンがある。ただし、「EU の歌」の歌詞はオリジナルのドイツ語のみで、翻訳も行われていない（604 頁参照）。



#### EU official languages

български	latviešu
español	lietuvių
čeština	magyar
dansk	Malti
Deutsch	Nederlands
eesti	polski
ελληνικά	português
English	română
français	slovenčina
Gaeilge	slovenščina
hrvatski	suomi
italiano	svenska

#### Other languages

русский	українська
---------	------------

EU の公式サイト<sup>587</sup>のトップページ (<https://europa.eu>)

2024 年 4 月 1 日現在、24 の公用語の他にロシア語とウクライナ語で公開されている。

<sup>585</sup> トルコ語はキプロスの公用語の一つである（もう一つの公用語はマルタ語）。

<sup>586</sup> European Commission, The Commission's use of languages, in [https://commission.europa.eu/about-european-commission/service-standards-and-principles/commissions-use-languages\\_en](https://commission.europa.eu/about-european-commission/service-standards-and-principles/commissions-use-languages_en).

英語は1973年、イギリスの加盟に際し、公用語となった。同国は、2020年1月末、EUを脱退しているが、公用語について定めるEU法（EU理事会が全会一致で制定する規則）が改正されない限り、英語は公用語であり続ける。なお、英語はアイルランドとマルタの公用語でもあるため、EUの公用語から削除される可能性は非常に小さい。

アイルランドも1973年にEU（当時はEC）に加盟しているが、アイルランド語が公用語に指定されたのは2007年である。それまで公用語でなかったのは、アイルランドでは英語が広く使用されており、アイルランド語をEUの公用語に加える必要性がなかったことによる。

※ アイルランドはアイルランド語を第1公用語に、英語を第2公用語に指定している<sup>587</sup>。

なお、EU圏内で最も多くの者が母語としているのはドイツ語である。ドイツ人とオーストリア人のほとんどは、この言語を母語とし、全EU市民の約20%に相当する。外国語としては英語の使用頻度が最も高い。

EUの行政機関である欧州委員会において、文書は英語、仏語、独語で作成されるが、議論は英語のみで行われることが多く、通訳は行われない。他方、立法機関であるEU理事会と最高意思決定機関である欧州理事会では全ての公用語の使用が認められ、メンバーの発言は全ての公用語に同時通訳される。欧州議会でも議員は母語で発言することができ、発言は全公用語に訳される。これに対し、EU裁判所の判事はフランス語を使用することが多い<sup>588</sup>。

### ◎ 多言語化の長所と短所

前述したように、EUは個々の加盟国の公用語をEUの公用語に指定する。これによって諸国の独自性が尊重されるとともに、EU市民は自らの母語でEUに関する情報を得ることができるが、これは翻訳という困難で、費用のかかる公務を増やしている。EUの行政機関である欧州委員会には翻訳を行う専門部署が設けられており、正職員だけでも450人を擁する（非正規職員は約2000人）<sup>589</sup>。

なお、EUの文書が全ての公用語に正確に翻訳できるとは限らない。これには該当する単語が無い場合だけでなく（それがあっても、完全に同じ意味を持つとは限らない）、使用される単語には重みやニュアンスの違いがある場合も含まれる。例えば、「EUの機能に関する条約」<sup>590</sup>前文は、EUについて以下のように定めているが、英語や仏語の表現に比べ、独文の表現には重みがある。

英文	DETERMINED to lay the foundations of an ever closer union among the peoples of Europe,
仏文	DÉTERMINÉS à établir les fondements d'une union sans cesse plus étroite entre les peuples européens,
独文	IN DEM FESTEN WILLEN, die Grundlagen für einen immer engeren Zusammenschluss der europäischen Völker zu schaffen,

英文・仏文の“union”に比べ、独文の“Zusammenschluss”には含蓄があり、「結束した組織」というニュアンスを持つ。なお、ドイツ語にも“Union”という単語はあるが、それは用いられていない。また、英文・仏文の“people/peoples”（人々）とは異なり、独文の“Völker”は「民族」や「国民」という意味を持つ単語である。このような言語上の問題に

<sup>587</sup> Land Steiermark, Welche Sprache spricht die EU, in <https://www.europa.steiermark.at/cms/beitrag/11327505/3084244/>

<sup>588</sup> Ibidem.

<sup>589</sup> Burkhard Birke, The English we speak, in <https://www.deutschlandfunk.de/englisch-weltsprache-europa-amerika-amtssprache-popkultur-100.html>.

<sup>590</sup> 本書では「EUの機能に関する条約」と訳してあるが、この条約名の「機能」にあたる表現も各公用語で完全と同じではない。例えば、英語・仏語では“Functioning/fonctionnement”と、独語では“Arbeitsweise”と記されるが、意味やニュアンスは異なる。

基づき、「ヨーロッパの人々」または「ヨーロッパ諸国民」があるテーマについて共通の認識の下で正確に議論できるとは限らない。

なお、「民族」や「国民」といった概念の定義は必ずしも統一されていないだけでなく（219 頁参照）、日本語による意義とは異なる場合がある。つまり、国や時代によって、その定義は変わってきた（597 頁参照）。また、「民主主義」や「法の支配」といった理念・原則、また、「住所」といった一般的な単語の意義は統一されているわけではない（143、597 頁参照）。そのため、EU 内でも、その内容について見解が分かれることがある。なお、これは言語・翻訳上の問題ではない。

EU 裁判所における訴訟でも、EU 法で用いられている概念の定義・解釈が問題になることが多い。例えば、EU 法は「労働者」(worker) の移動の自由を保障しているが（636 頁参照）、その内容が争われている。同じ概念は加盟国の法律でも用いられており、それには季節労働者や実習生は含まれないことが一般的であるが、EU 裁判所は、EU 法上の「労働者」には両者も含まれると判断している。これは EU が保障する移動の自由をより多くの者に与え、EU 統合を発展させるためである。

#### 【参考】 eTranslation

EU は“eTranslation”と呼ばれるインターネット翻訳システムを開発し、予め登録したユーザーに無料で開放している。この機械翻訳を使うと、EU に関し、ある公用語で書かれた文書・情報を他の公用語に翻訳することができる。

URL <https://cor.europa.eu/en/engage/Pages/e-translation.aspx>

#### ◎ 欧州評議会の公用語

欧州評議会（552 頁参照）は英語と仏語を公用語とする。文書は個々の加盟国によって、その公用語に翻訳されており、同評議会は翻訳に関して責任を負わない。このように評議会は EU とは異なるアプローチを採用しているが、国際機関の制度・実務としては一般的であり、EU の方が特殊である。なお、欧州評議会は、EU のように、市民に直接、関わる法律や行政措置を設けているわけではないため、公用語を増やす意義ないし必要性は大きくない。



この資料は入稻福智著『地域研究ヨーロッパ～欧州の本質～』からの抜粋です。

全編（PDF A4 約 700 枚）は下の URL よりダウンロードすることができます。

ファイルのサイズは約 70MB と容量が大きいのので注してください。

<https://eu-info.jp/europe2025.pdf>

